

# 『太平広記』における 「もの言う動物」に関する一考察

小 山 瞳

## 1. はじめに

現実の世界では、言語を通じてコミュニケーションを行えるのは人間だけであるが、文学の世界においては、動物が人間の言語を理解しているかのような振る舞いをしたり、言語を用いて人間と会話をしたりすることがある。動物がものを言うことは擬人法の一種であり、「おとぎ話」や童話にもみられる。説話においても、もの言う動物が登場し、動物がものを言うことは、説話を構成する最小単位であるモチーフ (motif) にもなっている<sup>1)</sup>。

管見のかぎり、中国の説話には、動物と人間のあいだを変身し人間と会話する動物は頻出するが、一方で動物のすがたのまま、もの言う動物はほとんど出てこない。そのことは、先秦および唐代の「寓言」において「もの言う動物」の例が限られていることや<sup>2)</sup>、北宋時代に編纂された『太平広記』に「もの言う動物」のモチーフがあまり用いられていないことからもうかがい知ることができる。

「もの言う動物」のモチーフは、動物が動物の姿のまま、人間のことばを話すパターンと、動物が魔法などを使って人間に変身してからものを言うパターン、あるいは人間が動物に変身してから動物と会話をするパターンもある。このうち、変身して人間のことばを扱う動物や動物に変身してもの言う動物については、変身のモチーフとしてまたべつに論じる必要がある<sup>3)</sup>、先行研究の積み重ねも多い<sup>4)</sup>。

ところが、動物が変身をせず、「もの言う動物」のモチーフをもつ説話

(以下、「もの言う動物」のモチーフと省略する)の研究は十分に行われてきたとはいえない。そこで、本稿では、先秦から唐五代までの説話を収録する『太平広記』における「もの言う動物」のモチーフについても考察を行い、中国中世紀の説話文学のなかで創作活動がどのようにして行われたのかについて一端を探ることとする。

## 2. 「もの言う動物」のモチーフについて

『太平広記』の「もの言う動物」像について述べる前に、説話におけるモチーフという概念について触れておきたい。

説話の型<sup>タイプ</sup>とモチーフとの違いについて、S. トンプソン著、荒木博之・石原綏代訳『民間説話 理論と展開——下』(社会思想社、1977年) 216～217頁にかけて次のようにのべる。

説話の型というのは独立に存在する伝承的物語である。それは完全な説話として語られ、その意味内容は他の物語に従属しない。たまたま他の物語と一緒に語られることもあり得るが、それが単独で語られるということはその独立性の証明となる。単一のモチーフからなっていることもあれば多くのモチーフからできあがっていることもある。たいていの動物昔話、笑話、小話は単一モチーフの型である。普通のメルヘン(シンデレラ、白雪姫のごとき)は多くのモチーフからなっている型である。

モチーフとは、伝承のなかに生き残る力をもった説話のなかの最小の要素である。残存する力を持つためには、それは何か異常な、そして人の注意を引くものを持っていなければならない。たいがいのモチーフは三つの分類のなかにあてはまる。最初は物語のなかの行為者である——神々、不思議な動物たち、あるいは女魔法使い、人食い鬼、妖精のごとき異常な存在、さらには人気のある末子とか意地悪い継母のような様式化された人物たち、第二は行為の背景にあるもの——呪

物、変った慣習、奇妙な信仰等、第三は単一の出来事であり、これが大多数のモチーフといわれるものである。独立に存在することができ、したがって現実の説話の型ともなり得るのがこの第三のモチーフなのである。説話の伝承的型のなかで群を抜いて多いのがこの単一のモチーフから成るものである。

つまり、モチーフとは、それ単独で説話の<sup>タイプ</sup>型として成立することもあるほか、S. トンプソンのいう「不思議な動物たち」や「女魔法使い」のような、説話の<sup>タイプ</sup>型とまではならないが、説話を構成する要素となる存在といえることができる。これらモチーフは、通常では起こりえないこと・発生しえないものであり、人の注意を引くものでなければならない。「もの言う動物」についても、通常では起こりえないことであるために、人の注意を引き、モチーフとして成立することができる。

ところで、S. トンプソンは同書360-361頁にかけて、「もの言う動物」のモチーフについて次のようにのべる。

動物については、肉体的には人間の属性をまったくもたないものでも、不思議な能力を附与されているものがいろいろと想像されている。もの言う動物 (B210) は昔話にはごくふつうに出てくる。しかしもっと広く信じられているのは超人的な知覚、または知恵をもつ動物 (B120-169) である。鳥、蛇、魚が忠言を与えたり、隠れた宝をみつげ出す、動物はまた人間の眼には見えない幽霊や精霊を見ることができ、予言をするものもあり、たいていのが運不運の前兆を示すことができる。(後略)

昔話では、もの言う動物がよくみられる。たとえば、「亀に負けた兎」(『日本昔話大成』番号39) の亀や兎は姿かたちが人間とは異なるが、人間のようにもものを言ってやりとりをする。ところが、昔話の読み手(あるいは聞き手)は、亀や兎がものを言うことで驚いたりはしない。読み手の関心は、亀や兎がものを言うことではなく、亀がどのようにして兎との競争に打ち

勝ったのかということにある。この場合、「もの言う動物」のモチーフは、説話を構成する要素ではあるものの、説話の型<sup>タイプ</sup>とはいえない。

S. トンプソンが例とする「知恵をもつ動物」についても、読み手（あるいは聞き手）の関心は、動物がものを言うことよりも、その動物がどのような知恵を人間に提供したかという点にある。

もちろん、『太平広記』の時代に説話の型<sup>タイプ</sup>やモチーフの概念が存在したというのではない。しかし、こうした民話学の理論をもって『太平広記』の説話をとらえなおすことは、中国中世期の説話文学における創作のあり方を考えるうえでひとつの指標となりうるのではないだろうか。

### 3. 『太平広記』における「もの言う動物」像

『太平広記』の動物説話のなかで、人間に変身することなしに、ものを言う動物の種類としては龍・蛟・虎・山魃・馬・豕<sup>ぶた</sup><sup>5)</sup>・鼠・猩猩・狐・蛇・鸚鵡・鸚鵒・魚・亀がある<sup>6)</sup>。

このうち、龍、蛟については動物から人間への変身の可能性の有無が確認できないことを考慮し、除外した<sup>7)</sup>。また、人間が動物に変身したあと、動物から話しかけられる例（巻471「薛偉」（出『続玄怪録』）や、人間が動物に転生したあとに人間と話をする例（巻439「李校尉」（出『法苑珠林』））、夢のなかで動物が人間に変身して話をする例（巻467「王瑤」（出『耳目記』））も除外した。一方、動物から人間への変身のモチーフを含みながらも、人間に変身する前にもものを言うことが確認できた巻456「忻州刺史」（出『広異記』）や夢のなかで動物が変身をせずにもものを言う巻426「漢景帝」（出『独異記』）のような例は含めた。

また、『太平広記』には、ある動物の習性や生息地について記す博物学的記録もあるが、これらは対象には含めず、「○○（動物の名前）曰＋……（発話内容）」、「○○云……」、「○○謂……」とあり、その動物の発話内容が示されている説話だけを対象とした。

以上の条件で『太平広記』の動物説話から、もの言う動物の説話を抽出

『太平広記』における「もの言う動物」に関する一考察

し、動物の種類・もの言う動物に対する驚きの有無・会話の状況を並べると、次のような結果が得られた。

(表) 『太平広記』動物説話における「もの言う動物」について

	題名および出典	動物の種類	会話の状況	もの言う動物に対する驚きの有無
1	卷109「釈智聡」(出『唐高僧伝』)	虎	虎が僧侶の呼びかけに答える (◎)	無
2	卷311「張偃」(出『聞奇録』)	虎	虎が神に不平をのべる (◎)	無
3	卷426「漢景帝」(出『独異志』)	虎	夢で虎が陳述する (△)	無
4	卷428「劉薦」(出『広異記』)	山魃	山魃が虎に命じて人を襲う (★)	無
5	卷428「斑子」(出『広異記』)	山魃	山魃が虎に命じて人を襲う (★)	無
6	卷430「婦生」(出『聞奇録』)	虎	虎同士で会話をする (○)	無
7	卷435「楊翁佛(別鳥語)」(出『論衡』)	馬	馬同士で会話をする (○)	無
8	卷435「季南」(出『抱朴子』)	馬	馬同士で会話をする (○)	無
9	卷439「都末」(出張璠『漢紀』)	野豕	野豕が人間に話しかける (△)	有
10	卷440「王周南」(出『幽明録』)	鼠	鼠が人間に話しかける (△)	無
11	卷440「終祚」(出『幽明録』)	鼠	鼠が人間に話しかける (△)	無
12	卷440「天宝彌騎」(出『広異記』)	鼠	長寿の鼠が陳述する (○・◎?)	無
13	卷441「蔣武」(出『伝奇』)	猩猩	猩猩が、象の伝言を伝えるために人間と話をする (★)	無
14	卷441「蕭志忠」(出『玄怪録』)	虎、麋ほか	動物同士で話をする・動物が神人に願望をのべる (◎・△)	無
15	卷446「能言」(出『朝野僉載』)	猩猩	猩猩がことばを発する (○・★)	無
16	卷449「李氏」(出『広異記』)	狐	狐が人間に話しかける (○)	無
17	卷456「忻州刺史」(出『広異記』)	蛇	蛇が人間に話しかける(その後、人間に変身する) (○)	無
18	卷460「張華」(出『異苑』)	鸚鵡	鸚鵡が予知をする (★)	無
19	卷460「鸚鵡救火」(出『異苑』)	鸚鵡	鸚鵡が天神の呼びかけに答える (◎・★)	無
20	卷460「雪衣女」(出『譚賓録』)	鸚鵡	鸚鵡が予知をする (★)	無
21	卷460「劉潜女」(出『大唐奇事』)	鸚鵡	鸚鵡が予知をする (★)	無
22	卷468「永康人」(出『異苑』)	亀、桑樹	亀が樹木と会話をする (○・△)	有

もの言う動物に対する驚きの有無については、説話中の登場人物や語り手が、もの言う動物に対して驚きの態度をみせているかを基準とした。つまり、登場人物がもの言う動物に対して驚きの態度をもつということは、その説話の主要な関心はもの言う動物にあることになり、「もの言う動物」のモチーフが独立した説話として成立することになる。この基準でいえば、もの言う動物に対する驚きがある説話は表中の9、22のみであり、『太平広記』所収の説話には「もの言う動物」のモチーフが独立した説話としては成立するものは多くないことがわかる。

また、会話の状況別に、①神仏との関わり（1、2、3、14、19、20：記号◎）、②異類同士の会話を人間が聞き取る（4、5、6、7、8、14、23：記号○）、③動物が人間に語りかける（3、9、10、11、12、13、15、17、18、23：記号△）、④発話ができる動物（鸚鵡、猩猩、山魃など）が人間（あるいは天神などの人間相当のもの）と話をする（4、5、16、19、20、21、22：記号★）の4ケースに分けられる（重複あり）。

以下、『太平広記』のもの言う動物説話について①～③の状況について考えてみたい。なお、④発話ができる動物については、ものを言うことに対する驚きの質が、ものを言わない動物とは異なると考えられるため、別の機会に論じることにする。

### 3-1. 神仏との関わりのなかで「もの言う動物」について

神仏との関わりで動物がものを言う説話は、虎や鸚鵡に多くみられる。鸚鵡については本当に人間のことばを模倣することができるため、霊鳥として扱われ、神仏に関する説話においても用いられたのだろう。また、鸚鵡には、巻460「鸚鵡救火」（出『異苑』）のように仏典から伝来した説話も存在する<sup>8)</sup>。一方、虎は鸚鵡のようにものを言うことはない。ところが、虎も鸚鵡同様、祭祀儀礼や神仏と関連してものを言う説話がある。

虎は四獣の一であり、一年の豊饒を感謝する「虎祭り」の風習があったことが『礼記』効郊性篇に載る<sup>9)</sup>。虎が祭られたことは説話のなかにも見え、そのなかでものを言う虎が登場する。次に挙げる巻426「漢景帝」（出

『独異記』)である(以下、もの言う動物の記述に二重下線を、それに対する人間の反応を示す記述に一重下線を引いた)。

漢景帝好遊獵。見虎不能得之，乃為珍饌，祭所見之虎。帝乃夢虎曰「汝祭我，欲得我牙皮耶。我自殺，從汝取之。」明日，帝入山，果見此虎死在祭所。乃命剥取皮牙。余肉復為虎。

漢の景帝は好んで狩りをした。虎を見つけたが捕まえることができず、珍饌をお供物として、虎を祀った。(その日の晩に)帝の夢に虎が出てきて言った、「おまえが私を祀ったのは、私の骨と皮が欲しいからであろう。私は自ら死ぬので、おまえはそれを取ればいい。」翌日、帝が山に入ると、祀った場所で虎が死んでいた。そこで、皮と骨を剥ぎ取るように命じた。余った肉はまた虎になったという。

虎が人間の夢に登場し、虎のすがたのまま発話している。夢のなかとはいえ、虎がものを言うことは通常では考えられないことである。そのことは、原文に「帝乃夢虎曰……」とあるように、虎が帝の夢のなかに出てきたこと対して、説話の語り手が驚きの口調を見せていることから読み取れる。そして、事態は虎が言ったように進展し、翌日、虎は死んだ状態で発見される。このように、虎がものを言うことは通常では考えられないことであり、虎がものを言っても驚かれないようにするには、夢を見るなどの特別な状況設定が必要であった。

巻426「漢景帝」は『独異志』からの引用であり、同時代の説話よりも秦漢代を舞台とする説話をよく収録することから、古い時代から伝わった逸話・神話などを集めた説話集だったと考えられる<sup>10)</sup>。この説話も古い時代から伝わる虎を祭る風習を反映した神話からとられたものではないだろうか。

夢以外にも、神仏の力によって虎がものを言う場合もある。仏教説話の一種である巻109「釈智聡」(出『唐高僧伝』)に高僧に話しかける虎が登場する。

唐潤州撮山棲霞寺釈智聡、嘗住揚州安樂寺。大業之乱、思帰無計、隠江荻中、誦法華經、七日不食。恒有虎遶之、聡曰「吾命須臾、卿須可食。」虎忽發言曰「造天立地、無有此理。」忽有一老翁、榜舟而至、翁曰「師欲渡江至棲霞寺、可即上船。」四虎一時涙流、聡曰「爾与我有縁耶。」於是挾四虎利涉。既達南岸、船及老人、不知所在。聡領四虎往棲霞舍利塔西、經行坐禪。衆徒八十。咸不出院、若有所事、一虎入寺鳴号、以為恒式。聡至貞観中遷化、年九十九矣。

唐潤州（江蘇省鎮江市）にある撰山の棲霞寺の釈智聡はかつて揚州の安樂寺に住んでいた。大業の乱で帰ることができなくなり、長江の葦のなかに隠れて法華經を唱え、七日間何も食べなかった。たえず、虎が釈智聡のまわりをめぐり、聡が言った、「私の命はもう少しで絶えるでしょう。あなたに食べてもらっていいのだ。」すると虎がことばを發して言った、「天地が創造されてより、そのような道理がありませんか。」すると、一人の老人が出てきて、かたわらの船を出して言った、「和尚さまは江を渡って棲霞寺におもどりになろうとしていらっしゃるのでしょうか、どうぞ船にお乗りください。」四頭の虎は同時に涙を流し、聡が言った、「おまえたちと私には縁があるのだろう。」そこで四頭の虎を連れて江を渡った。南岸に着いたときには、船と老人がどこに行ったかはわからなくなっていた。聡は四頭の虎を連れて棲霞寺の舍利塔の西側に行き、場所をかえては座禪を組んだ。付き従う者が八十人いた。みな寺を出ることはなく、何かあれば、虎が寺に入ってきて鳴き叫ぶことがいつものことだった。聡は貞観年間中に遷化し、その年は九十九であった。

僧侶である釈智聡は虎がものを言うことに驚かず、あとから船を手配する老人が虎に驚く様子もない。先に紹介した巻426「漢景帝」のように、虎がものを言うに際して、人間が夢を見ている様子はなく、釈智聡が虎に何かの術を行なったりもしていない。このあと、虎が四頭いたことが明かされ、涙を流したり、釈智聡に従ったりするなど、虎が人間のように描か



れている。また、巻109「釈智聡」は『唐高僧伝』から引用されたものであり、『法苑珠林』巻65にも同内容のことを載せることから、すぐれた僧侶の事績を宣伝することが目的であり、猛獣である虎を従わせるほどの徳があったことをいうのである。

以上2話の説話については、「もの言う動物」のモチーフが独立した説話の型<sup>タイプ</sup>ではなく、説話の構成要素として使われているにすぎない。虎がものを言うことは不思議なことではあるが、虎がものを言ったとしてもそのことにとどまってはいることがわかる。

### 3-2. 異類同士の会話を人間が聞く

異類同士の会話を人間が聞くモチーフについては、介葛盧という大夫が牛の会話を聞いて王に解説する説話があり、『春秋左氏伝』僖公二十九年の条や『列子』黄帝篇にもさかのほることができる。それらの説話では、動物同士の会話を理解できるものは特殊な能力をもつ者とみなされ、動物同士の会話を聞いて、動物の言う通りになることが証明されるというパターンをとる。『太平広記』にも馬同士の会話を人間が聞き、馬の言う通りにもものごとが進展する説話に巻435「楊翁佛（別鳥語）」（出『論衡』）、巻435「季南」（出『抱朴子』）が、二頭の虎が食べるべき人間について話し合う説話に巻430「帰生」（出『聞奇録』）がある（上表参照）。このほか、動物と植物が会話を交わす例もある。次に挙げる巻468「永康人」（出『異苑』）である。

吳孫權時，永康有人入山遇一大龜，即逐之。龜便言曰「遊不良時，為君所得。」人甚怪之，載出，欲上吳王。夜泊越里，纜舡於大桑樹。宵中，樹呼龜曰「勞乎元緒，奚事爾耶。」龜曰「我被拘繫。方見烹（月+宀）。雖盡南山之樵，不能潰我。」樹曰「諸葛元遜博識，必致相苦。令求如我之徒，計從安出。」龜曰「子明無多辭，禍將及爾。」樹寂而止。既至。權命煮之。焚柴百車，語猶如故。諸葛恪曰「然以老桑方熟。」獻之人仍說龜樹共言，權登使伐取。煮龜立爛。今烹龜猶多用桑薪，野人故呼

亀為元緒也。

呉の孫権の時、永康（浙江省金華市）のある人が山に入って一匹の大きな亀に出くわしたので、これを追い払った。亀はすぐに言った、「泳げない時はお前さんにこの身を与えてやりましょう。」その人はたいそう奇怪に思い、亀を載せて、呉王に献上しようとした。夜、越の村に泊まり、大きな桑の樹木に船をつないでいた。夜、樹木が亀に呼びかけて言った、「元緒さん、これはご苦労さまです。あなたはどうしたのですか。」亀が言った、「私は捕まえられて、今にも煮られようとしているのです。ですが、南山の樹木をすべて伐り倒して、私をその木で煮たとしても、私を煮て食べることはできません。」樹木が言った、「諸葛元遜（諸葛恪のこと）は博識ですから、きっと苦しめられることになりますよ。たとえ私のような老木でも、どうしたって災難に遭わないようにはできません。」亀が言った、「子明さん、あなたはことばが多すぎます。災いがあなたにも及ぶでしょう」すると樹木は口を閉ざしてしゃべらなくなった。永康の人が亀を都の孫権のもとに献上すると、孫権は亀を煮るように命じた。車百台分の柴を使って煮たが、もとのようにことばを話した。諸葛恪が言った、「古い桑の木なら亀を煮ることができます。」亀を献上した人から、亀と桑の木が話をしていたと聞いた孫権は、桑の木を伐採させて、その木を薪にして亀を煮ると、亀はすっかり煮えた。だから今でも亀を煮るのに多くの桑の薪を使い、地元の人は亀を「元緒」とよぶのだ。

亀はものを言うことによって、孫権に献上され、焼かれることになった。さらに亀と知り合いと思われる桑までもが、諸葛恪（諸葛亮の甥にあたり、呉に仕えた人物）のことを口にしたために伐採されることになった。最後には、亀を煮るのに桑の木が使われる理由と、呉の地方で亀のことを「元緒」と呼ぶ理由について触れ、ものごとの起源や由来を説いている。

また、呉の孫権の時代のこと、永康の人が献上した、元緒というもの言う亀が、諸葛恪の進言によって、子明という名をもつ桑の木でできた薪で

煮られることについて、時、場所、人物をすべて語り尽くしていることから、時、場所、人物に結びついた伝説だといえる。巻468「永康人」と同内容の説話は『水経注』巻40「漸江水」にも引かれており、漸江（浙江省にある河川）のあたりで語られた伝説だったことを物語る資料でもあるだろう。

ここでは、亀がものを言うことは驚きの対象となっていて、「もの言う動物」のモチーフは独立した説話の型タイプとなっていることがわかる。

### 3-3. 動物が人間に語りかける

『太平広記』の諸説話のなかで動物が人間に語りかける説話は散見される。その一つである野豕いのししがものを言う巻439「都末」（出張璠『漢紀』）を次に挙げる。

莎車王殺于闐王。于闐大人都末出見野豕，欲搏之，乃人語曰「無殺我，為汝殺莎車<sup>11)</sup>。」都末異之，即与兄弟共殺莎車王。

莎車（新疆ウイグル自治区ヤルカンド県にあった国家）の王は于闐（新疆ウイグル自治区ホータン市にあった国家）の王を殺した。于闐の大人である都末は野豕いのししを見つけ、これをしばろうとすると、人語を發して言った、「私を殺さないでください、あなたのために莎車（の王？）を殺します。」都末はこのことを奇異に思ったが、まもなく兄弟とともに莎車の王を殺した。

野豕いのししがものを言ったことに対して、都末は驚き、その後まもなく莎車の王を殺したとあるものの、この記述では、野豕いのししがものを言ったことと莎車王の殺害の関係が不明瞭である。この都末が君得を殺害した事件については、『後漢書』巻88「西域伝」にも次のような記載がある<sup>12)</sup>。

莎車將君得在于窳暴虐，百姓患之。明帝永平三年，其大人都末出城，見野豕，欲射之。豕乃言曰「無射我，我乃為汝殺君得。」都末因此即与兄弟共殺君得。（後略）

莎車將の君得は于寘（于闐に同じ）で乱暴をし、人民はそれに苦しめられていた。明帝永平三（60）年に、于闐の王族である都末は城を出て、野冢を見つけたので、矢で射ようとした。すると野冢が言った、「私を射らないでください、私があなたのために君得を殺しましょう。」都末はそこで兄弟とともに君得を殺した。（後略）

都末が殺害した君得の位が「莎車王」から「莎車將」に変更があるほかに、具体的な年号が加わる。さらに、莎車將である君得が暴虐であったという前提が加わったことで、都末による君得の殺害が正当化されている。また、野冢がしゃべったことを、都末がいぶかしの描写は消去されているものの、「因此」とあることによって、野冢が君得を殺すことを宣託しているかのようにもみえる。

都末が君得を殺害したことについて、『後漢書』のほうは野冢がしゃべったことという不思議な現象と、都末が君得を殺したという国家の方向性が相関関係にあり、いわば五行志的記述である<sup>13)</sup>。それに対して『太平広記』が引く張璠『漢紀』では、都末が君得を殺すことの正当性が記載されない代わりに、野冢がしゃべったという変異のほうに注目が集まっている<sup>14)</sup>。そのことは、野冢がものを言うときに「人語曰」とあることからもうかがえる。

『太平広記』が引用元とする張璠『漢紀』は張璠『後漢紀』をさし<sup>15)</sup>、范曄が『後漢書』成立に際して参照した書物でもある<sup>16)</sup>。『後漢書』卷88「西域伝」の都末の記事は、張璠『後漢紀』にあった都末の記事に、年号のほか、君得が暴虐であったという情報が付け加えられたものだと考えられる。張璠『後漢紀』については、『隋書』経籍志および『新唐書』芸文志にも記載があり、『太平広記』編纂時には存在し、それが引用されたと考えられる。『後漢書』に転載される前のすがたを残す張璠『後漢紀』の記事が、『太平広記』の収録基準に適合したために引用されたのではないだろうか<sup>17)</sup>。

『太平広記』が引用する張璠『後漢紀』の都末の記事も『後漢書』卷88「西域伝」の都末の記事もともに「もの言う動物」のモチーフを含む。前者では、

「もの言う動物」は驚きの対象となり、独立した説話の<sup>タイプ</sup>型となっているが、後者ではもの言う動物は驚きの対象とはならず、莎車の将として乱暴をはたらいた君得が殺されたことに重きがあるといえるだろう。このことは、かたや正史となり、かたや説話として扱われた、歴史的記録に対する著述態度の違いを表すもののだといえる。

#### 4. おわりに

『太平広記』所収の動物説話のなかで「もの言う動物」のモチーフがどのように用いられ、どのように変遷を遂げたのかについてのべた。

動物がものを言うことが主題となり、独立した説話の<sup>タイプ</sup>型となる説話はほとんどなく、多くの「もの言う動物」のモチーフは説話の構成要素の一部として機能していることが判明した。このことは、言い換えれば、あるひとつの説話が成立するまでに複数のモチーフが組み合わせられて、より複雑な構造をもつ説話へと進化を遂げていく過程だともいえる。

また、『太平広記』には創作というよりは歴史的記録と思われる短い説話もあることを指摘した。同じ「もの言う動物」のモチーフを用いた記録であったとしても、歴史的記録として扱われる場合と、文学的創作として扱われる場合では記述の方式の違いがあることもみた。

「もの言う動物」のモチーフは先秦および唐代の「寓言」にもみえ、これらの作品は『太平広記』ではなく、同時代に編纂された『太平御覧』や『文苑英華』などの別の類書に収録されている<sup>18)</sup>。これら「寓言」作品については『太平広記』ではなく、同時代に編纂されたそのほかの類書に収録されるべきだとする、ジャンルを分ける意識があったと思われる。動物がものを言うという、創作性の強い作品であっても、それは「寓言」という文体であるために『太平御覧』や『文苑英華』が収めるのである。

今回は説話のモチーフの変遷がどのように発展したのかについて先秦から初唐までの説話を中心に考察をおこなった。中唐以降の説話の変遷も考慮に入れると同時に、『太平広記』以外の類書との関係についても考察を

行うことも視野に入れた考察をすることは、今後の課題である。

## 注

- 1) S. トンプソンの「民間故事分類」(Motif-index of folk-literature) にB210「もの言う動物」(Speaking animal) やB211「動物が人間のことばを使う」(Animal uses human speech) の分類があり、さらに下位項目にB211.2.2.1.の「もの言う虎」(Speaking tiger) などのモチーフもある。S. トンプソン著、荒木博之・石原綏代訳『民間説話 理論と展開——(下)』(社会思想社、1977年) 末尾附録の「モチーフ・インデックス」参照。
- 2) 管見のかぎり、先秦の「寓言」のなかで、もの言う動物の例は、『戦国策』に直魏の江乙(楚策「虎の威を借る狐」)、蘇代(燕策「漁夫の利」)、諸子百家の『莊子』外物篇「輒鮒の急」と『韓非子』説林「虱の争い」、唐代の裴炎による「猩猩銘」、柳宗元による「三戒」の「黔之驢」などに限られる。「寓言」については、高芝麻子「「漁夫の利」の動物たちはなぜしゃべるのか——『戦国策』に見える擬人法——」(『古典教育デザイン』第3号、2017年) および渡辺志津夫「唐代の動物寓話——中国寓話史における韓愈の再評価——」(広島大学文学部中国中世文学研究会『中国中世文学研究』第59号、2011年) を参照した。
- 3) 変身のモチーフについては、D100「人間が動物に変身する」(Transformation: man to animal) がある。注1)も参照。
- 4) 中国の動物と人間の変身譚に関する先行研究には次のようなものがある(以下、時代順)。  
中野美代子『中国人の思考様式 小説の世界から』(講談社、1974年)、戸倉英美「変身譚の変容——六朝志怪から『聊齋志異』まで——」(『東洋文化』第71号、1990年)、松崎治一「中国変身譚雑考——人虎伝の系譜について」(『筑紫女学園短大紀要』第28号、1991年)、岡田充博『唐代小説「板橋三娘子」考』(知泉書店、2012年)、富永一登「六朝志怪から唐代伝奇へ——異類婚を中心として——」(『中国古小説の展開』、研文出版、2013年)、島森哲男「中国の人虎変身譚——「脱ぐ／着る」の民俗学(その二)——」(『宮城教育大学紀要』53号、宮城教育大学、2019年)
- 5) 加納喜光『動物の漢字語源辞典』(東京堂出版、2007年) 133-134頁によると、「豕」はブタとイノシシを含み、「豚」は家畜のブタをさすという。ここではブタとイノシシを含めたブタ類の総称として「豕」を用いることとする。
- 6) 『太平広記』については、汪紹楹校勘『太平広記』(中華書局、1961年) を底本とし、一部、張国風会校『太平広記会校』(北京燕山出版社、2011年) も参照した。
- 7) 龍や蛟については、変身をしているのか見きわめがつかないためである。なお、富永一登「「柳毅伝」——龍説話の展開——」(『中国古小説の展開』研文出版、2013年) 333頁に“神女婚の上に、仏教伝来の中国化された龍女を加味して作られた創作異類婚龍であることがわかった。”とあり、龍女が人間化されたとのべる。富永書にしたがうと、龍女はもともと人間の女性を想定して書かれたことになり、変身のモ

チーフもあまり重要でなかったことになる。

- 8) 鄧麗玲『漢訳仏典動物故事之研究』（文津出版社、2010年）200～201頁および362頁附録「仏典動物故事相關典籍対照表」の17「鸚鵡救火」参照。
- 9) 『礼記』効郊性篇の「虎祭り」に関する記載は次のとおりである。“天子大蜡八。伊耆氏始为蜡，蜡也者，索也。歳十二月，合聚万物而索饗之也。（中略）迎猫，为其食田鼠也，迎虎，为其食田豕也，迎而祭之也。祭坊与水庸事也。（天子の蜡祭においては、八神がまつられる。始めて蜡祭を行ったのは伊耆氏であるが、蜡とは求め集めることである。毎年十二月に、万物の霊を呼び集め、饗応するのである。（中略）虎を招くのは、虎が田を荒らす猪を食べてくれるからであり、故に招いてまつる。）”なお、『礼記』については、中華叢書『十三經注疏分段標点礼記注疏』（新文豊出版公司、2001年）を底本とした。
- 10) 李剣国『唐五代志怪伝奇叙録 中冊』（増訂本）（中華書局、2017年）1094頁参照。
- 11) ここには脱字があると考えられる。張国風『太平広記会校』（北京燕山出版社、2011年）は沈本・陳本によって「將軍」の二字を補うが、このあと「莎車王を殺した」とあることを考えると、意味が合わないため、これには従わない。
- 12) 『後漢書』については、『後漢書』（中華書局、1964年）を底本とした。
- 13) 佐野誠子『五行志と志怪書——「異」をめぐる視点の相違——』（『東方学』第104号、2002年）32頁下段に“五行志の視点は一貫して国家に向けられている。”（原文の漢字は旧字体）とある。この佐野論文の記載に基づくならば、都末の一件も五行志的記載といえよう。
- 14) ここでいう「変異」とは、政治（国家の大事）と関わる異常である「災異」と、異常な小事である「怪異」を包括した概念として用いた。「変異」と「災異」および「怪異」の定義については、佐野誠子『怪を志す』（名古屋大学出版会、2020年）76頁の記述を参照した。
- 15) 張国風『「太平広記」版本考述』（中華書局、2004年）337頁参照。また、張璠については、『三国志』魏書巻4に載る裴松之注に“案張璠、虞溥、郭頒皆晋之令史。（中略）璠撰『後漢紀』，雖似未成，辞藻可觀。（張璠、虞溥、郭頒はみな晋の令史である。（中略）璠撰『後漢紀』は、未完のままのようだが、その美しい文章は見る価値がある。”とある。なお、『三国志』については、『三国志』（中華書局、1982年第2版）を底本とした。
- 16) 『後漢書』は東晋～宋の范曄（398～445年）によるものである。当時、個人によって編まれた後漢の歴史書が複数存在し、張璠『後漢紀』もその一つであった。それらをもとに編纂された後漢の王朝史が『後漢書』である。『後漢書』編纂の経緯については、『後漢書』（中華書局、1964年）の宋雲彬「校訂説明」を参照。
- 17) 注15)同掲書117頁に“《太平広記》的編輯情況，当与《太平御覽》相似。（中略）区别在于，《太平御覽》侧重于經史，《太平広記》侧重于小説故事（『太平広記』の編集の状況は、『太平御覽』と似ている。（中略）『太平御覽』が經史を重視するのに対して、『太平広記』は小説・説話を重視しているところにある。”とある（原文は簡体中国語）。

『太平広記』における「もの言う動物」に関する一考察

- 18) たとえば、『莊子』内篇にある「轍鮒の急」は『太平御覧』巻937に、柳宗元の動物寓話「三戒」の「黔之驢」は『文苑英華』巻368に収録されている。